広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要
〈第51号　2004〉

「私の住んでみたい町や村」をテーマにした総合的な学習のための教材開発

髙　田　準一郎

本稿は，中学２年生の総合的な学習で実施した授業の報告である。社会科地理的分野における教科書の内容，とくに第３部を生かした学習展開とした。国土の特色やテーマ学習の事例をもとに，「私の住んでみたい町や村」という学習課題で，調べた内容を工夫してわかりやすく表現する展開を図った。課題作品は，教科書の内容と関連させたものが多く，自己の問題意識のもとで，理解を深めたと思われるものとなった。教科発展型の総合的な学習展開の設計と関わって，自己の問題意識をどのように学習課題という形で深めていくかは，今後の検討に値する問題である。

１．問題の所在－学習課題の設定と学習展開の設計－

１）地理的分野の内容構成

中学校の社会科における地理的分野の内容は，「(1)世界と日本の地域構成」「(2)地域の規模に応じた調査」「(3)世界と比べて見た日本」の三項目から構成される。帝国書院版『社会科　中学生の地理－最新版－』では，この三項目に対応させ，「第１部　私たちの世界そして日本」「第２部　さまざまな地域の調査」「第３部　世界と比べてみた日本」の３部構成になっている（表１）。

第３部は，内容的には，「１章　さまざまな面からとらえた日本」で，日本の国土に関わる自然環境（地形・気候）や人口（三大都市圏，過密・過疎），資源や産業（エネルギー・資源・農業・工業・第３次産業），地域間の結びつき（交通・通信），生活・文化（歴史的な町並み）を扱う。この学習内容を受けて，「２章　さまざまな特色を関連づけてみた日本」で，日本の特色をまとめる学習構成をとっている（表２）。

表１：教科書の内容構成（帝国書院編，2003）

第１部　私たちの世界そして日本
第２部　さまざまな地域の調査
第３部　世界と比べてみた日本

表２：第３部の内容構成（帝国書院編，2003）

１章　さまざまな面からとらえた日本
１．自然環境の特色をとらえよう
２．人口の特色をとらえよう
３．資源や産業の特色をとらえよう
４．地域間の結びつきの特色をとらえよう
５．生活・文化の特色をとらえよう
２章　さまざまな特色を関連づけてみた日本
１．世界と比べてみた日本の特色をまとめよう
２．日本の国内の特色をまとめよう

日本の特色を関連づける学習については，たとえば，『中学校学習指導要領の展開』（以下，『指導要領の展開』）に言及がある。「生徒の主体的な学習を促すためには，「山がちな国土に，多くの国民が豊かな暮らしが出来るのはなぜか」「日本が世界の交通網，情報網の拠点となっているのはなぜか」のような学習課題を設定し，個人やグループで調べ，考察させたい」としている。

２）学習課題の問題点

『指導要領の展開』で設定された学習課題には，問題点も少なくない。まず，「山がちな国土に，多くの国民が豊かな暮らしが出来るのはなぜか」の学習課題を検討してみよう。この学習課題は，１章の学習と重複する。自然環境や人口の学習では，日本の地形別人口を扱う。低地16％には人口51％，台地16％には人口29％，山地73％には人口20％の人々がそれぞれ住む。山がちな国土の特色や大半の国民は低地に住んでいる特色を捉える。次いで，資源や産業学習では，日本の工業の特色は，加工貿易にあることを考察する。資源や産業における加工貿易の学習内容は，『指導要領の展開』による学習課題に答えるものと重なる。つまり，学習内容の繰り返しが避けられない。

重複の問題よりも深刻なのは，この学習課題には，「山がちな国土」ゆえに抱えている自然災害などへ

Jun'ichiro TAKATA：Materials Development for Integrated Study for the 2nd Grade Students in Junior High School："A Town or a Village I Want to Live in"

の問題意識がないことである。つまり，この学習課題には，「山がちな国土」がもっている脆弱性への危機感がない。地震やそれに伴う津波，火山による噴火，洪水や干ばつ，冷害などの自然災害に対して，どのように考えるのか。自然災害における発生機構の解明と予測，防災体制の確立は，急務を要する課題である。「豊かな暮らしが出来る」のは，このような防災体制があってのことである。でなければ，束の間の「豊かな暮らし」にすぎない。

次いで，「日本が世界の交通網，情報網の拠点となっているのはなぜか」の学習課題を検討してみよう。この課題は，日本の交通網や情報網の特色をまとめるには有効である。しかし，本当に「拠点となっている」のか。「拠点となっている」ことを前提としていいのか。日本の交通網や情報網がもつ構造的な脆弱性への問題意識はなくてもよいのか。

たとえば，ハブ空港の問題がある。日本では，新東京国際空港（以下，成田空港）と関西国際空港がハブ空港に位置づけられている。しかし，本格的には機能しきれていない。成田空港は，24時間空港ではない。夜間の発着には，大きな制限がかかる。1994年に24時間空港として開港したのが，関西国際空港である。成田空港と同様に滑走路は，１本しかない。

1981年に開港したシンガポールのチャンギ空港は，２本の滑走路をもつ。チャンギ空港の旅客数，約2170万人（1995年度）に対し，成田空港は，約2150万人（1995年度）であった。チャンギ空港では，年間約4400万人の対応が可能になっている。1998年マレーシアのクアラルンプール新国際空港，1998年中国の香港国際空港，2001年韓国のインチョン（仁川）国際空港が相次いで，開港した。アジアのハブ空港をめざす競争は激化している（川上ほか編，2004，p.243)。しかし，「日本が世界の交通網，情報網の拠点となっているのはなぜか」の学習課題には，このような事態に対する危機感がない。

３）教科発展型「総合的な学習」のテーマの設定

本校では，研究部が総合的な学習における教育課程の編成を行っている。研究部の提案では，中学校の総合的な学習は「内容的には，中１「平和」→中２「環境」→中３「国際理解」，方法的には，中１「調べ方」→中２「まとめ方」→中３「伝え方」に沿ったテーマ設定が望ましい」となっている。

表３：テーマ学習の事例

テーマ学習１．	干潟の保全について考えよう
テーマ学習２．	大都市圏の環境の改変について考えよう
テーマ学習３．	これからの循環型社会について考えよう

この提案に沿い，内容的には，日本の国土に関わる自然環境や人口，資源や産業，地域間の結びつき，生活・文化を扱う。テーマ学習の事例として，ラムサール条約に関わる干潟の保全，ポートアイランドや琵琶湖の水質に関わる大都市圏の環境の改変，リサイクルや再生可能な資源に関わるこれからの循環型社会などを検討する（表３)。

「総合的な学習」のテーマは，「私の住んでみたい町（街）や村」とした。「私の住んでみたい町や村」としたのは，第３部の１章における学習との重複を避けるためであり，日本の特色を捉えるにとどまる学習ではなく，探究的な学習課題とするためである。加えて，自己の問題意識をみえやすい形にしたいためである。

２．学習内容の概要

１）実施形態の概要

授業は，クラス別に展開し，集中して三学期（１～３月）に実施した。担当は，高田（準）を主担とし，高田（悟）を副担とした。三学期の授業時数は，11～13時間であった。目標は，「国土の特色を理解し，調べた内容を工夫して，わかりやすく表現する」ことにおいた。国土の特色の理解やテーマ学習の事例をもとに，「私の住んでみたい町や村」という学習課題のもとで，自己の問題意識によって具体的なテーマを設定し，調べた内容をＢ４判のケント紙１枚に，工夫してわかりやすく表現する展開を図った。

２）学習内容の概要－第１～２時－

第１時では，「どのような町に住んでみたいか。どのような村に住んでみたいか。住んでみたい町や村のイメージを言葉にしてみよう」という設問に答えた。Ａ６判のワークシートには，「田舎でも便利な町」「のどかな村」「いなかでも都会でもないとこ」「都心に近い」「海にしずむ夕日がみえる」「生活に必要なものが全て徒歩10分以内」「空気がきれい」「スポーツが盛んで，緑の多い町」「南国のにぎやかなところ」「医療面が整っており，また便利な町」「高いビルがあまりない」「空気がきれいで星とかもきれいに見える所」「科学技術が発達していながら自然にやさしい文明の街」「都会すぎず田舎すぎない所」「ハイジみたいな生活」「大自然にかこまれて，木の家に住みたい」「四季が楽しめる街」「暖かくて，物価が安い」「デパートやお店などが多くて便利な

所！！」「都会がいい！！」「島で山も海も湖もある。なんでもある島」などの言葉があがった。次いで，「「住んでみたい町（街）や村」のイメージを地図にしてみよう。図解してみよう。絵画風にイラスト風にしてみよう」という活動にあたった。

第2時では，地図帳を使って，「私の住んでみたい町（都市）ベスト三」という課題に取り組んだ。日本の都市のなかで，住んでみたい町を三つ選び，そのイメージを言葉にしてみた。「①那覇，海がきれい／いつも暑い／健康，②札幌，食べものがおいしい／雪が多く降る／広い，③中村，四万十川が流れている／魚がおいしい／静か」「①京都，方言（京都弁，関西弁）／学生の街／お寺が多いから落ち着いた感じ？，②福岡，けっこう都会？／あったかい～／方言（九州弁），③那覇，海がキレイ／あったかい／人々がのんびりしている」などがあがった。住んでみたい町は，歴史的な町並みの残る京都や南国で自然に恵まれた那覇に集中する傾向がみられた。

3）学習内容の概要－第3～8時－

テーマ学習の展開を整理したい。テーマ学習の事例として，ラムサール条約に関わる干潟の保全の問題をとりあげた。これまで，大都市の近郊での干潟は，大規模に埋め立てられることが多かった。しかし，干潟を保全しようという動きが活発になってきた。東京湾では三番瀬，名古屋港では藤前干潟，福岡湾では和白干潟などである。干潟がもつ機能には，水質浄化機能や生物生息機能，生物生産機能，親水機能，陸地保全機能などがある。保全する意味は，干潟がもつ水質浄化機能や生物生産機能が大きい。もちろん，それだけではなく，生物生息機能にも重要な意味があった。干潟は，湿地とともに水鳥の生息地として欠かせない。この水鳥の生息地を国際的に守ろうとするのがラムサール条約である。

授業では，教科書に掲載の写真や干潟の分布図を活用して，展開を図った。干潟でののりの養殖は網で育てられる。写真で，これらの様子を確かめた。次いで，三番瀬などの干潟のある場所を地図帳を使って確認し，都市圏や工業地帯との関係を考えた。堤防で締め切られて，保全されなかった干潟に諫早湾がある。鳥の飛来数がどのように変化したかに着目した。諫早湾は，国内最大のシギやチドリの飛来地だった。しかし，締め切られた後，鳥の飛来数は，急減した。この事実を通して，ラムサール条約のもつ意味を考えた。

次いで，大都市圏の環境の改変の問題として，六甲山地のニュータウン造成地やポートアイランドの事例をとりあげた。神戸市では，山が海にせまっているので，平地が少ない。六甲山地の山々を削って，人工島をつくった。これが，ポートアイランドである。広島では，西部開発の埋め立てがこれにあたる。しかし，背後の鈴ケ峰山麓の岩盤が固かったため，あまり削られずに残っている。このような開発方式のもつ問題を考えた。もう一つは，琵琶湖の水質に関わる問題である。アオコや赤潮が発生する年も多くなっている。滋賀県は，りんを含む合成洗剤の使用を禁止するなどの条例を制定した。また，ヨシの群落を保全するなどの取り組みも始まった。これらの取り組みのもつ意味を考えた。

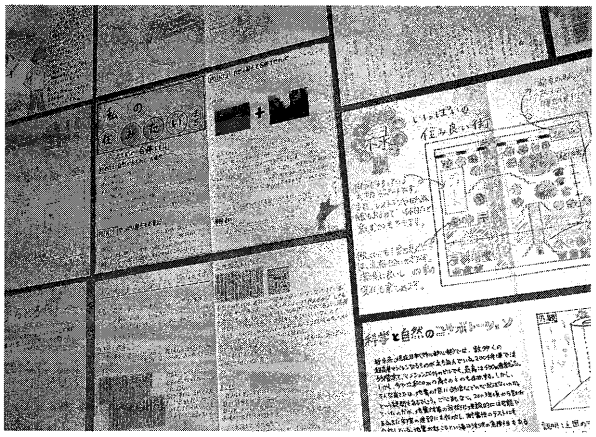
続いてのテーマ学習では，リサイクルや再生可能な資源に関わるこれからの循環型社会を展望した。ごみは，なぜ増えるのか。現代の文明は，「自然（地球）→資源→製品→ごみ」（『向山式サイクル図で地球環境の授業』，1996）で，循環していない。「ごみ→自然（地球）」とする。あるいは，「ごみ→資源」とする。このようにすることで，循環構造となる。このような循環構造は，どのようにすればできるのか。ドイツのフライブルク市の取り組みもある。循環型社会における技術開発のテーマは，ここにあるという展開を図った。しかし，現実には，「ごみ→資源」とするには，矛盾する問題も多い。武田（2000）によれば，「これまで計算されたリサイクルの例から，回生するものに対して平均三倍の物質とエネルギーが必要との仮定（p.127）」を設定し，「使用した物を徹底的にリサイクルしようとしたりすると，膨大な損失が発生する（p.127）」と指摘する。

4）学習内容の概要－第9～13時－

課題作品を作成するための確認をした。B4判のケント紙1枚にまとめる。配付したケント紙に，他の用紙をはりつけてもよい。広告（ポスター）のイメージで作成する。キャッチフレーズをつくる。このような町に住んでみたい。このような村に住んでみたい。ポスターのように，文字などをデザインしてみる。イラストや図解，文章などを使って，わかりやすく説明する。教科書の第3部と関連させてみる。日本の国土に関わって，自然環境（地形・気候）や人口（三大都市圏，過密・過疎），資源や産業（エネルギー・資源・農業・工業・第3次産業），地域間の結びつき（交通・通信），生活・文化（歴史的な町並み）などがあった。このような内容と関連させてみる。テーマ学習の事例としては，ラムサール条約に関わる干潟の保全，ポートアイランドや琵琶湖の水質に関わる大都市圏の環境の改変，リサイクルや再生可能な資源に関わるこれからの循環型社

写真１：課題作品 (1)

写真２：課題作品 (2)



会などがあった。このような見方や考え方を展開してみる。授業で確認するとともに，このような作成要領を記した「課題レポート作成にあたって（覚え書き）」のプリントを配付した。加えて，最近の新聞記事のなかから，「元宇品島をまるごと自然博物館（野外ミュージアム）にしよう」という取り組みや，「かつての宮島で上演された演芸を復活させよう」という活動などを紹介した。

３．学習展開の考察と課題

１）学習課題の考察

「私の住んでみたい町や村」としたのは，自己の問題意識をみえやすい形にしたいためであった。当初，研究部に提出した計画案では，「景観から地域を読む」という学習展開で，「これからの地域のあり方の展望」を探るものであった。しかし，地理的分野における教科書の内容，とくに第３部を生かした展開に修正した。国土の特色の理解やテーマ学習の事例をもとに，「私の住んでみたい町や村」という学習課題で，調べた内容をＢ４判のケント紙１枚に，工夫してわかりやすく表現する展開を図った。

国土の特色の理解やテーマ学習の事例を，「客観化の視線」だとすれば，「私の住んでみたい町や村」は，「自己からの視線」である。私たちは，基本的に二重の視線をもっている。「自分からの視線」と「客観化の視線」である。このように説明するのは，竹田青嗣（2004）である。

「一方でわれわれはとことん「自分の世界」の中に"閉じこめられている"。誰も「自分の生」という世界から抜け出ることはできない（これをバタイユは実存の孤独と呼びました）。しかしもう一方でわれわれは，自分の視線から距離を取り，自分と世界全体を一つの客観的な関係として眺める視線をもっています。（中略）。つまり「実存の世界視線」と「客観化の世界視線」の二重性ということが，人間の世界像の基礎をなしている（ pp.10-11.）」。

このような意味において，学習展開を，二重の視線で整理することができる。第１～２時は「自分からの視線」，第３～８時は「客観化の視線」，第９～13時は「自分からの視線」からの学習である。地理的分野の学習は「客観化の視線」に対応し，総合的な学習は「自分からの視線」に対応した構成であったと整理することもできる。「私の住んでみたい町や村」を描くことは，「自己からの視線」を客観化することであると同時に，「今，住んでいる世界」を理解することでもあった。この問題は，「原風景」をどのように考えるかとの問題にも重なる。

２）課題作品の考察

写真１～２は，生徒が作成した課題作品である。課題作品のキャチフレーズには，「自然いっぱいの町，空気もおいしい！！　こんな町に住みたいな」「自給自足の循環」「１年中スキーのできる村に住みたい」「発見！！　山を越えるとそこは，理想の町でした・・」「自然と共に生きる町」「花いっぱい☆笑顔咲く☆ Cleanな町」「日本の美しい四季を感じてみませんかーみんなで住もう四季ケ丘町ー」「科学と自然のコラボレーション」などがあがった。

課題作品には，循環型社会のテーマをとりいれるなど，授業で学習した内容を生かしたものも少なくなかった。たとえば，「自給自足の循環」をキッチフレーズとした作品では，「自然→食品→肥料→自然」という循環図が示されている。ただし，自己の問題意識よりも，評価の観点にあわせたと思われる作品もなかったわけではない。

これらの課題作品は，提出をもって学習を終了することになった。発表する時間を確保ができれば，課題作品をさらに学習活動に生かすことができた。三学年では，「伝え方」に重点をおいた展開になる。その意味でも，発表する活動の時間が確保は必要だった。課題作品には，教科書の第３部と関連させたものや，テーマ学習に関わる見方や考え方を展開したものも多かった。教科発展型の総合的な学習展開の設計に関わって，自己の問題意識をどのように学習課題という形で深めていくかは，今後の検討に値する問題である。

付記

本稿は，中等教育研究開発室（2004）：『中等教育研究開発室年報』第17号の報告に，大幅な加筆を施したものである。

文献

川上浄明ほか編(2004)：『新編地理資料2004』，東京法令出版，312p.

竹田青嗣(2004)：『現象学は〈思考の原理〉である』，筑摩書房，264p.

武田邦彦(2000)：『リサイクル幻想』，文藝春秋，190p.

帝国書院編(2003)：『社会科　中学生の地理－最新版－』，帝国書院，227p.

澁澤文隆ほか編(2000)：『改訂中学校学習指導要領の展開社会科編』，明治図書，255p.

浜島書店編(2003)：『地理の学習Ⅱ』，浜島書店，56p.

向山洋一監修，岡田健治ほか編(1996)：『向山式サイクル図で地球環境の授業』，明治図書，179p.